

陳舜臣さんを語る会通信

NO.8

May 2020

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員

発行日 2020年5月1日

『青山一髪（せいざんいっぱつ）』

本号で取り上げた陳舜臣著『青山一髪』（2003 中央公論新社）の初出は、読売新聞、2002年5月～03年6月朝刊連載です。なお、2006年、文庫本出版に際し、『孫文』と改題されています。いろんな角度から見ていきます。まずは、テーマ・内容、『青山一髪』という題名ほかです。（編集委員 橘 雄三）

《1. 孫文の革命生活の前半を描く》

少し長くなりますが、『青山一髪』「あとがき」の引用からはじめます。

「いまの私には孫文がたびたびの蜂起に失敗し、反逆者として故国に帰ることもできず、亡命地からも清国の要求で追放されていた時代のほうが書きやすい。孫文という大きなテーマは1911年の辛亥を境にして、その前と後に分けることができる。

この『青山一髪』という小説は、辛亥以前の孫文とその周辺を書いたのである。亡命生活から中国本土（中原）への帰還までという、孫文の革命生活の前半をえがくことが、この題名にあきらかにされている」

「孫文は本質的には国際人であったが、中国が弱国であるかぎり民族主義者にならざるをえないと述べている。

孫文は中国が列国と肩をならべるようになれば、民族主義をすて、世界人として、のびやかに日本人と友情をたしかめ合えると思っていたにちがいない。

この小説が書かれているころの孫文は、かなり樂觀的であったようだ。しかし、これからのち、時代はしだいにきびしくなる。

それが歴史の流れであったのだ」

《2. 題名、『青山一髪』について》

続けて、「あとがき」の引用です。

「この題名の『青山一髪』は、最終章にも言及したように、蘇軾（東坡）の詩句から採った。それは「澄邁通潮閣（ちょうまいえきつうちょうかく）」と題する二首の詩のあと一首である。「青山一髪是（こ）れ中原」はすでに本文でも解説したが、その前の句の、

— 杳杳（ようよう）として天は低く、鶴（こつ）の没する処（ところ）

は、じつは最終章の「是れ中原」と対照するよう

に、冒頭の章に大竹（トアテク）たちが乗ってきた船の名が、FALCON（はやぶさ）すなわち鶴であるとしたのだ」



上の絵は、読売新聞連載時の李庚氏の挿画、「青山一髪」です。孫文は1911年10月12日、アメリカ、コロラド州のデンバーで、「武昌、革命軍に占領さる」の新聞を見、英仏経由で帰国します。

「左舷に青山一髪が長いあいだ見えた。一髪の線がしだいにふとくってくる。孫文は12月25日、上海に着いた」

《3. 史実が重く、小説的場面が少なくなった》

続けて、「あとがき」の引用です。

「この小説はもっとフィクションをちりばめるつもりであった。だが、小説の背景となる史実がきわめて重く、そのためどうしてもフィクションのはいりこむすきが狭くなってしまった。

当初の意図にくらべて、小説的場面が少なくなることをおそれる一方、無理をしてフィクション化することも慎んだ」

私（橘）は、陳舜臣さんの作品を、半分、知識欲から、勉強のつもりで読んでいましたので、詳しい時代背景、大歓迎だったのですが、もう少し、小説としてのサービスがあってもよかったのでは、というのが感想です。

『青山一髪』章立てと読売新聞連載時の李庚氏挿画

巻	章	内 容		
上	海東青	日本の台湾統治始まる		革命
孫文起つ	公車上書以後	康有為らによる上書。孫文、日清戦争中にハワイ往復		
	決起前夜	韃虜を駆除し、中国を恢復し、合衆政府を創立する		
	重陽の後	1895年9月9日（陰暦）広州蜂起失敗。孫文海外亡命		
	亡命の客	孫文、横浜で辮髪切る。横浜興中会結成		処刑前の革命党人
	中堂遭難	1895年3月、李鴻章、狙撃される。4月、下関条約		
	強学会	康有為、「強学会」設立。『強学報』発行		
	地球一周	李鴻章、スエズ→ロシア→欧州→アメリカ→帰国		
	檀香山	孫文、ハワイ（檀香山）で恩師カントリー博士と再会		清朝の高官
	博愛	イオラニ同窓生に「博愛」「天下為公」を揮毫		
	旧金山	金鉱掘り、鉄道建設のクーリー（苦力）の歴史		
	大陸横断	サンフランシスコ→デンバーの演説会→ニューヨーク		
	三裔地	ニューヨークのイタリア人、ユダヤ人、唐人雑居地		
	デヴォンシャー街	恩師、カントリー博士の住所		宮崎夫妻と孫文
	今日は日曜日	孫文捕らわれる		
	幽閉	1896年10月、約二週間、清国公使館に監禁		
	大英博物館	南方熊楠と出会う		
	中山樵	宮崎滔天と出会う		
下	維新	1898年6月、光緒帝、変法宣布		短刀を持つ秋瑾
辛亥への道	壮士還らず	9月、戊戌の政変。→康有為、梁啓超日本亡命		
	保皇会誕生	日本で保皇会誕生。正副会長、康有為、梁啓超、徐勤		
	義和の狂乱	1900-01年、義和団事件		
	準備	哥老会、天地会、更に李鴻章、康有為にも接触		
	健将たち	1900年、惠州蜂起失敗。山田良政殉難		ニューヨークの孫文
	台湾四十四日	伊藤内閣成立。児玉総督に期待した孫文の思惑潰える		
	留学時代	来日留学生、爆発的に増加。孫文、熊楠訪問		
	蘇報	1903年、上海愛国学社の機関誌『蘇報』上で章炳麟や鄒容が反清民族革命論を説く。結果、両人は監禁		
	致公堂	孫文、秘密結社致公堂（天地会、三合会）入会		
	洞窟の誓い	1904年、華興会黄興、長沙の洞窟で会党トップと会う		革命者
	同盟会	1905年、東京で、興中会、華興会、光復会ほかで結成		
	烽火連なる	1907年。徐錫麟・秋瑾蜂起失敗。鎮南関蜂起失敗		
	王朝の黄昏	1901年、李鴻章死去。1908年、光緒帝、続いて西太后死去。清朝軍の主力は新軍。		
	辛亥の風	1911年4月、黄花岗の役失敗。10月10日、革命軍、武昌を占領		
	是れ中原	デンバーで武昌拳兵の新聞を見、英仏経由で帰国		

『青山一髪』関係、孫文の動向（日本を中心に）

ここに取り上げた表は、孫文記念館編(2011年)『孫文・日本関係人名録』「孫文の日本滞在一覧表」を基に編集委員が追加・加工したものです。なお、日付は、『青山一髪』に拠っていません。（編集委員 橘雄三）

『青山一髪』関係 孫文の動向（日本を中心に）※日付は『青山一髪』に拠っていない								
番号	西暦	出発地	到着地	到着日	滞在期間	離日地	離日日	目的地
1	1894	日清戦争(7月-95年4月)。10月、上海→(日本)→ハワイ。11月、ハワイで興中会結成						
2	1895	香港に戻る。2月、興中会結成						
3	1895	10月、広州蜂起。最初の挑戦、失敗→亡命(香港、5年間在留禁止)						
4	1895	香港	(神戸)横浜	1895/11/13	約20日	横浜	1895/11	ハワイ
5	1895-97	横浜興中会結成。→アメリカ→イギリス。1896年10月、ロンドンで清国公使館に幽閉。解放後、大英博物館で南方熊楠と出会う。イギリス→アメリカ。カナダ経由で日本へ						
6	1897-00	ビクトリア	横浜	1897/8/16	3年弱	横浜	1900/6/8	香港
7	1898	9月、戊戌の政変(→康有為、梁啓超日本亡命)						
8	1900	香港	神戸	1900/7/24	1ヶ月	横浜	1900/8/22	上海
9	1900	上海	長崎	1900/9/4	約20日	神戸	1900/9/24	台湾
10	1900	義和団事件(1900-01年)。10月、惠州蜂起失敗。孫文、蜂起時、在台湾						
11	1900-01	台湾	神戸	1900/11/15	5ヶ月	横浜	1901/4/9	ハワイ
12	1901	2月、孫文、和歌山に南方熊楠を訪ねる						
13	1901-02	ハワイ	横浜	1901/6/16	7ヶ月	横浜	1902/1/17	香港
14	1902	香港	横浜	1902/2/13	10ヶ月	横浜	1902/12/4	サイゴン
15	1902	大月薫さんと婚約。大月さん、1906年、女児出産						
16	1903	サイゴン	横浜	1903/7/22	2ヶ月	横浜	1903/9/26	ハワイ
17	1904	8月-05年9月、日露戦争						
18	1905	マルセイユ	横浜	1905/7/19	3ヶ月	横浜	1905/10/7	サイゴン
19	1905	8月、東京で中国同盟会結成						
20	1906	マルセイユ	横浜	1906/4	2ヶ月?	横浜	1906/7	シンガポール
21	1906-07	サイゴン	横浜	1906/10/9	5ヶ月	横浜	1907/3/4	サイゴン
22	1907	5月、黄岡蜂起。6月、七女湖蜂起。7月、徐錫麟・秋瑾蜂起。9月、坊城蜂起。12月、鎮南関蜂起						
23	1908	2月、欽州・廉州蜂起。4月、河口蜂起						
24	1910	2月、広州新軍蜂起						
25	1910	ハワイ	横浜	1910/6/10	15日	神戸	1910/6/25	シンガポール
26	1910-11	12月、ペナンから西回りでヨーロッパへ、更にアメリカへ						
27	1911	4月、黄花崗(第二次広州)蜂起。10月10日、武昌蜂起。辛亥革命始まる						
28	1911	デンバーで武昌蜂起の成功を知り、英仏経由で帰国の途に。12月25日、上海に着く						
29	1912	1月、中華民国成立。孫文が臨時大総統に就任。2月、清朝宣統帝退位。3月、袁世凱中華民国臨時大総統就任						

上の表の補足■孫文は、『青山一髪』に描かれた期間、すなわち、1895年の広州蜂起失敗による国外亡命から、1911年12月の帰国まで、16年の間に12回日本へ来ており、合計日本滞在期間は6年に及びます。中国(清朝)では御尋ね者で、香港(英、租借地)では、広州蜂起以降、5年間在留禁止で、結果、日本での滞在が多くなったと思われます。また、シンガポール、ペナンなどの東南アジア、そして、ハワイ、米欧への外遊など、国外が多く、鎮南関蜂起以外、前線にいたことはあったのでしょうか。孫文の外遊目的は、各地でのプロパガンダ、各地華僑への工作、資金集め、そして、欧米の政治形態の研究、情報収集などです。このことは、黄興と対照的です。

1901. 2 孫文、和歌山に南方熊楠を訪ねる

《1. 民俗学者・博物学者、南方熊楠》

南方熊楠（みなかた・くまぐす 1867～1941）は和歌山城下に金物商の二男として生まれました。中学卒業後、上京し、やがて、東京大学予備門に入学しますが、学業そっちのけで遺跡発掘や菌類の標本採集に明け暮れます。中途退学し、帰郷。1886年暮、渡米します。

広辞苑には、「民俗学者・博物学者。南北アメリカに遊学、1892年渡英、大英博物館東洋調査部員。粘菌を研究し、諸外国語・民俗学・考古学に精通」と記述されています。

熊楠は生涯、生業を持たず、したいことだけをして生きた人です。14年に及ぶ米・英遊学の費用、死ぬまでの25年間住んだ紀伊田辺の居宅購入資金等々、全て親兄弟持ちでした。金物商を営んでいた父親は



商才があったようで、蓄財し、やがて酒造業を興し成功させています。父の死後、熊楠の弟が家業を継ぎ、代

を重ね、今も（株）世界一統という社名で健在で、大吟醸「熊楠」は評判です。

《2. 「海外逢知音 南方学長属書 香山孫文拝言」》

ところで、熊楠と孫文の軌跡は1897年、ロンドンで交わります。孫文は1895年の広州蜂起失敗のあと、清国政府から懸賞金がかけられ、日本を経て米・英に亡命しますが、1896年、ロンドンで清国公使館に捕えられます。香港の医科大学時代の恩師、カントリー博士の助力で救われたあと、少なくとも68回、大英博物館に通ったといわれておりますが、ここで、博物館に職を得ていた熊楠と出会います。



そして四年後、二人は和歌の浦の「芦辺屋（阿しべや）」で再会します。今は跡地に案内板があるだけです。孫文の旅の疲れを癒したであろう景観はそのままです。上の画像は熊楠の懐中日記。孫文の筆。なお、日記は、南方熊楠顕彰館の所蔵です。

1900. 10 惠州蜂起失敗、山田良政殉難

《谷中全生庵山田良政君碑(1913建立)》

『青山一髪』から引用します。

「山田良政は三十二歳、弘前の人で、父は津軽藩士であった。青森師範を出たあと東京の水産講習所を卒業した。その後、北海道昆布会社の駐在員として中国に赴任した。日清戦争には通訳官として従軍して、語学はよくできたのである」

1895年の広州蜂起のあと、5年しての惠州蜂起であった。清朝側に計画がもれたこともあり、内部の意思疎通が不十分で、ちぐはぐな蜂起となった。この蜂起で、山田良政は中国革命における最初の外国人犠牲者となった。

「孫文は革命が成功して共和国となった二年後（1913年）、鉄道視察のため来日した。そのとき、彼は山田良政のために碑を立てた。場所は東京谷中の全生庵である。「山田良政君碑」と三行に書かれ、墓碑銘は五十一字で、

民国二年二月二十七日

孫文 謹撰並書

と、署名が刻まれている」



画像は、webサイト「今日も日暮里富士見坂」より



山田良政君碑

也山田良政君弘前人
軍起惠州八月革命
義遂戰死呼其先
道之犧牲興之志
不覺也身雖殞滅而志
民國二年二月廿七日

孫文 謹撰並書